

「どの子ども地域で元気に育てよう」

～子どもの発達障害の理解とその支援について～

日時：平成23年2月4日(金) 14:50～17:00

会場：市川市映像文化センター

1 開会 (14:50～)

挨拶 こども部長

2 基調講演 (15:00～16:00)

・・・P1

「発達障害への理解と支援」

ー理解者に恵まれなければ、決して安定した適応はできないー

川崎医療福祉大学 特任教授 佐々木 正美氏

3 シンポジウム「地域支援についての提言」(16:00～)

コーディネーター 市川市こども部 部長 鎌形 喜代実

パネリスト1 中核地域生活支援センター長 朝比奈 ミカ氏 ・・・P4

「地域で発達障害児の支援を行う上で感じていること」

パネリスト2 コスモ市川(千葉県発達障害児・者親の会) 小泉 好子氏・・・P5

「保護者として、地域で子育てしていく中で感じていること」

パネリスト3 市川市教育センター 所長 大嶋 章一氏 ・・・P7

「教育として現在の発達障害への取り組み」

パネリスト4 市川市こども部発達支援課長 磯部 菊子 ・・・P8

「市川市こども発達センターの機能と役割」

4 まとめのことば (16:40～)

佐々木 正美 氏

5 閉会 (17:00)

○ 受付で配られました、アンケートにご協力をお願いします。

発達障害への理解と支援

— 理解者に恵まれなければ、決して安定した適応はできない —

佐々木正美（川崎医療福祉大学）

発達障害の人は、私たちが意味づけているような時間や空間に、自分を位置づける（組織化する）ことができない。だから彼らの方から私たちの世界や文化のなかに入ってくることはできない。私たちの方から彼らの世界や文化に十分に近づいて（入って）から、初めて私たちの世界や文化のなかに入ってくる道筋を、一人ひとり手を取って示してやらなければならない（L. ウィング）

発達障害の人は、自分の周囲で起きていることの意味が、よく理解できない。また自分の意思や要求の伝え方がよく分からない。さらに時々刻々変化（推移）していく状況への、見通しをたてる（想像する）ことが困難である。その上そういう困惑や苦悩を解決するための想像力をはたらかせることができない（P. ハウリン）

視覚的なこと、具体的、規則的、習慣的、個別的なことの理解や記憶が優れている

その反対の想像力がはたらかない

全体ではなく、部分に関心、興味、認識が向かう

同時に複数の情報を処理したり、機能を発揮することが不得手である

予期せぬことが起きることを恐れる／スケジュール（予定）が必要である

肯定が意味になり、否定は意味を失う

自分のやりかたで行動する

言うまでもないことが理解できず、常識が身につみにくい

得意・不得意の差が大きい

能力が社会的に発揮できにくい

規則・役割・責任・相手の立場など、理解しにくい

自分で話すわりには、相手の言っていることの意味がわからない

字義どおりの理解をするので、冗談や比喩が通じない

治療的に治すような対応をするよりも、持ち味が発揮できるように援助する

理解できることは、融通がきかないくらい、きちんと実行する

嘘をつかず、理解できる規則はしっかり守る

優れた能力があるのに、謙虚である

筋道だった理論的な思考には優れている

非凡な能力をもった人がいる／非凡というほどではなくても、優れた能力をもっている

優れた能力を発見してくれる人に恵まれなければならない

過去の不幸な人の事例は、優れた能力よりも劣っているところを修正されようとした人々
こちらがやってもらいたいことと、相手の特性や気持ちの関係が大切

発達障害は、発達が遅れているのではなく、発達が偏っている（不均衡）ことを忘れずに
学習、作業、生活課題、環境を、視覚的・物理的に整える／視覚的構造化
スケジュールの予告を

二次的な情緒障害を予防する：

勉強に対する無気力

親や教師への激しい反抗

他者／弱い者への攻撃

不登校／ひきこもり

ストーカー行為

性衝動の亢進

指導は、カウンセリング・ルームでなく、家庭や学校など「自然な場所で」（小栗正幸）

子どもを育てる：

自尊心や自己肯定感情を育てる

喜びと悲しみを分かち合う／コミュニケーションへの原点

社会的存在に育てる：

人間関係（コミュニケーション）を育てる

家庭、学校、職場、地域社会に理解者を得る

発達障害の人が安定して適応している環境には、「必ず」特別な理解者が寄り添っている

再び、発達障害とは：

発達が遅れていることではなく、発達が偏っているということ

落ち込んでいるところの底上げではなく、突出しているところを発展させる

理解者に寄り添われて

障害より文化と考えるような気持ちで

日本人はみんなと同じが好きだが、際立った個性を尊重する気持ちで

大きな仕事をする人は、みんな大きな援助を得ている人

結論：自己肯定感情、自尊心が育つように支援する。それが養育、教育、その他の支援の
すべて／無理解なのに熱心な人が、最悪のことをしている

自閉症の認知特性と環境や情報のもつ意味の間のギャップを、丁寧に埋め合わせていく
（視覚的構造化の意義）（E. ショプラー）

意味のあるコミュニケーションをしながら共生する（G. メジボフ）

ノースカロライナには、ひきこもっている人や不幸な殺人を犯した人はいない（V. シア）

佐々木 正美先生 プロフィール

経歴

1966	新潟大学医学部卒業
1970-1971	プリティッシュ・コロンビア大学医学部児童精神科留学（レジデント）
1972-1977	国立秩父学園（重度知的障害児居住施設）厚生技官
1974-1977	東京大学医学部精神神経科助手（併任）文部教官
1974-1996	東京女子医学大学小児科非常勤講師
1977-1995	財団法人神奈川県児童医療福祉財団・小児療育相談センター所長
1988-現在	社会福祉法人横浜市リハビリテーション事業団参与
1992-現在	ノースカロライナ大学医学部精神科 TEACCH 部非常勤教授
1997-現在	川崎医療福祉大学医療福祉学部教授（2004年度から特任教授）

主な著書

こどもへのまなざし	福音館書店
続こどもへのまなざし	
完こどもへのまなざし	H23 1/12 発売
自閉症のための絵で見る構造化（1）（2）	学習研究社
自閉症のすべてがわかる本	講談社
アスペルガーを生きる子どもたちへ	日本評論社
その他 多数著書あり	

パネリスト1

朝比奈ミカ（あさひな みか）

プロフィール

中核地域生活支援センターがじゅまる センター長

東京都社会福祉協議会で勤務した後に、2003年に社会福祉法人一路会に転職。

2004年10月から現職。

市川市特別支援教育連携協議会委員、千葉県自立支援協議会・権利擁護部会委員、内閣府障害者制度改革推進会議・総合福祉部会委員など。

社会福祉士

発言要旨

1. がじゅまるの相談支援活動の状況について、発達障害児との関連で報告

- 中学校年代以降のご相談が多い
- 家庭支援が必要な場合に学校等から連携の要請を受けることが多い
- 18歳を過ぎたひきこもりの方の相談が多い
- 家庭内での衝動的な行動、地域社会での逸脱行動等についての相談が多い

2. 地域の相談支援機関としての役割

- 生活場面のなかでの丁寧なアセスメント
- 医療とのつなぎ
- 家族とのふり返し、気づきの支援
- ご本人とのふり返し、生活スキル習得の支援

3. 相談支援の現場で感じていること

- 個別性をどのように理解するか
- 付き合うスキルをどのように伝え、広げていくか
- 立場の違いから起きるコミュニケーションのズレを理解し、埋めていくことが重要

パネリスト 2

千葉県発達障害児・者親の会 コスモ市川グループ代表 小泉 好子氏

市川市在住 中3の男子 小4の男子 5歳の女の子 3歳の男の子 4人の子育て中の母親です。

わたし自身、発達障害のある長男を筆頭に4人のこども達を育てていく中で、大変お世話になった親の会関係の諸先輩、そして療育、保育園、学校の先生方への感謝の【思い】、私と同じように「困り悩んでいる」親御さんと共に、子ども達が「より良い生活」をおくれるよう、ほんの少しでも役に立てたらとの【思い】で登壇させていただくことにしました。

私たち一家は東京で長男を育て、小学校入学を期に、実家のある市川市に引っ越して参りました。

長男は生まれてからすぐ、「ミルクを飲まない」「寝ない」「泣いてばかりいる」「首がなかなか座らない」「人に慣れない」「離乳食を食べない」と発達障害のある子どもの特徴のオンパレード！！

子どもが大好きだったはずの私は、いつの間にか子どもが大嫌いに。いわゆる育児ノイローゼ状態となり、虐待まがいのことをしてしまう、ダメ母でした。

そのころのわたしは、自分も我が子も許せず、また、集団に入るとかんしゃくやパニックを起こし、奇声をあげて、走ったり泣いたりする我が子をどのように育てたらよいか、どこに相談したらいいのかかわからず、本当に孤独でした。

発達障害、発達凸凹のある子どもは、十人十色、千差万別で悩みの共有がしにくい一面があります。だからよけいに親も子どもも孤独な思いを感じやすいのではないのでしょうか。

最近、この障害をメディアが取り上げる機会も増え、一般にも知って頂けるようになりましたが、親の育て方や関わり方が悪いと責められたり、子どもがいじめにあったりとまだまだ偏見も多く、このようなことがますます親子を孤独にさせ、追いつめるのです。

さて、話はもどり、引っ越してきてすぐ、駆け込み寺のように、市川市こども発達センターへ相談に行き、旧みどり学園の外来で、PTを受け、学校が始まると教育センターへ相談に、さらに親の会にも助けを求め、気になる勉強会、講演会に参加しまくり、縁あって「コスモ」に入ることになったのです。

夢にまで見た小学校の「普通学級」に入学しましたが、やはり皆と同じようにすることは難しく、また何かとからかわれたり、イジメられたりして親も子も精神的にボロボロでした。本当に忙しかったのですが、コスモの活動に参加したり、こども発達センターや教育センターに通うことは心の支えとなり、ダメ母のわたしを少しずつ成長させてくれました。親と子の二人三脚の小学校時代でした。

このコスモで作業療法士の木村順先生と出会い、感覚統合療法を受け、親も子も「学び」「成長」でき、うちの子にはかなり難しい「たて笛」がふけるようになったり、自転車を補助なしで乗れるようになったり、なわとび、三点倒立ができるようになったりといろんな「できる」を経験させることができ、子どもに自信をつけさせてあげることができたと思います。

高学年になるとうちの子がいるせいで、「授業が進まない」「学級崩壊している」と陰口をされましたが、そのような事実は一切なく、本人もいじめを受け大変だったと思いますが、その時その時に、先生やお友達に助けられ、応援してもらい、無事小学校を卒業することができました。

この間、長男に気を取られ、すっかり子育てに自信をなくしていた私をあたたく見守り、子育てを教えてくださいだったのは保育園の先生方でした。そのおかげで下の子ども達もすくすくと成長。先生たちには本当に感謝感謝です。

さて、長男も中学生に。普通に何事もなく通っていると思っていた息子に小学校では一度も出たことのない問題行動が、トラブルが出たというのです。子どもより親のほうがめげてしまいました。転校も考えましたが、本人がガンバルと言ったので、静観し、彼の心のケアにつとめました。中学のシステムに慣れたことや

クラスみんなが成長したこともあったのか、2年生になりトラブルが減り、3年生ではほとんどなくなりました。家に遊びに来てくれる「友だち？」もできました。普通の子に比べ大変だと思いますが、なんとか進路を決めることもでき、このままいけば春には高校生になれそうです。

我が家の長男の成長を通していえることは、「うまく伝えられなくても」「時間がかかっても」「あきらめず」「苦しいことは苦しい」「困っている」と家族、友人、先生など相談し続けることでしょうか。

我が子は発達のコボコボがあり、どこまで育っても、普通に近づいても普通になれず、また、普通に「できる」こともあるため療育手帳もなかなか取ることもできず、「進路」も、やがてくる「就労」も子どもにあったところを見つけるのは本当に大変なことだと思っています。

でも、あきらめません！！ 彼らが生きて、楽しく生活できるようになるまで、自分たちが生きているかぎり、サポートしていき、自立への道を切り開いていこうと思います。

パネリスト 3

○自己紹介 教育センター所長 大嶋 章一

昨年4月の人事異動で第三中学校から教育センターに異動してまいりました。教育委員会教育政策課在任中は、須和田の丘支援学校分校設置を担当するとともに、特別支援学級設置に携わりました。教育センターの主要事業の一つに教育相談があり、不登校や発達に関する事など様々な相談を受けております。子どもたちの成長のためには、学校・家庭・地域の連携強化とともに、行政内部や外部機関、NPOなどの連携が必要であると考えています。

○発表要旨

1. はじめに

- ・特別支援教育は一般化され、発達障害についても概念や支援の方策についての理解は深まった。
- ・子どもたち一人ひとりの実態が異なるため、具体的な支援の方策について試行錯誤している。

2. 市川市教育委員会の対応

- ・平成19年度から市川市巡回指導職員を各学校に派遣している。
- ・特別支援教育コーディネータ研修会や県の委託事業を受けて研修会を開催している。
- ・学校のケース会議に招かれ、事例に基づく支援の方策を助言している。

2. 学級経営において

- ・中学校においてLDのお子さんの入学から卒業まで担任をさせていただいた。
- ・子ども理解や他の生徒との関係性をうまく築けず、お子さんの成長も、保護者の方との信頼関係も構築することができなかった。(一年生)
- ・保護者の方と一緒に「親の会」に参加させていただき、発達障害のお子さんたちの事例の紹介、具体的な対処方法、保護者の方々の願いを知り、二年生から三年生にかけての指導に生かすことができた。
- ・不十分な点が多々あったが、私にとって貴重な経験となった。

3. 学校と保護者の方の信頼

- ・お子さんの成長のためには、学校と保護者の方が相互理解していただき、共通の目標をもって、お子さんの成長に努めていただきたい。

4. 関係機関との連携

- ・私が学級担任をしていたころよりも、巡回指導職員の派遣などサポートする体制が格段と整っている。教育センターの教育相談を利用するとともに、関係機関・NPOとも連携を図っていただきたい。

5. 地域社会の中で

- ・発達障害も含め、障害のある方への理解は、大人の世代よりも子どもたちの方が上回っているように思う。子どもたちが成長し、やがて地域社会の中で安心して生活していくためには、同年代の子どもたちとの関係性を構築することが大切だと考える。

パネリスト 4

・自己紹介 発達支援課長 磯部 菊子

これまで、保育園の保育士、こども館の児童厚生員を経験する中で、大変ユニークで、一緒に遊んでいて面白い、それでいて、時々トラブルを起こしたり、巻き込まれたりする、天才に見えるときもあれば、あれれ？どうしたの？と首を傾げてしまうときもある、お子さんに出会ってきました。やがて、発達障害という言葉に行き当たり、今、保育園・幼稚園・学校そして広く社会の中で、起きている様々な課題と密接に関係していること、けれども彼らを取り巻く、人々も含めた環境を改善して、その特性にあった支援をすれば、当事者も周りの人も安定した生活を送れるということを知りました。

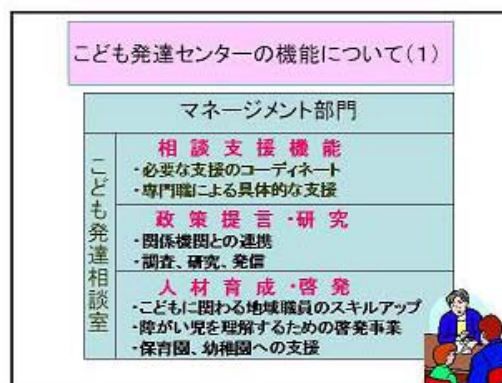
こども発達センターでは、21年度、22年度をとおしてコンセプトをまとめ、同時にこれまでしてきた保健との連携を一層強化し、また教育との連携への入り口に立つことができました。そして、発達に課題を持つお子さんの成長を助け、彼らが当たり前になり、安心して生活できるようになるための支援を目指しております。

市川市こども発達センターの機能と役割

平成23年2月4日

発達に課題を持つこどもの成長を助け、彼らがあたりまえに育ち、安心して生活できる地域を目指して

発達支援課

こども発達センターの機能について(2)

サポート部門	
こども発達相談室	療育支援機能 ・個別相談・指導 ・グループ指導 (大洲、行徳、大柏) ・訪問指導
通園施設	専門療育機能 ・肢体不自由児通園施設 おひさまキッズ ・知的障がい児通園施設 あおぞらキッズ



サポート部門
(療育支援機能)



個別指導(心理)



グループ指導
(大洲 行徳 大柏)



以上で
ご紹介は終わりです。
ありがとうございました。

小学生につきましては、教育と調整中です。詳細が決まり次第お知らせ致します。

**発達に課題をもつこどもの成長を助け、彼らがあたりまえに育ち、
安心して生活できる地域を目指して**

市川市こども発達センター: <http://www.city.ichikawa.lg.jp/>

市川市ホームページ→子育て→発達支援

ご参加ありがとうございました。